

ふ く だ す ま こ
福 田 須 磨 子

* 大正11年3月23日 長崎市生まれ

* 昭和49年4月2日 没 (52歳)



○ 略歴

高等女学校卒業後、小学校の代用教員となり、のち師範学校勤務。
昭和20年被爆、家族は爆死する。

昭和30年 朝日新聞「ひととき」欄に、被爆者の苦しみをつづった詩「ひとり
(33歳) ごと」が掲載される

被爆による紅斑症の症状があらわれ、入退院を繰り返す
「長崎をつづる会」に入会

昭和31年 処女詩集「ひとりごと」がガリ版刷りでつづる会より発行される
(34歳)

昭和33年 第二詩集「原子野」が刊行される
(36歳)

原水爆禁止運動に積極的にかかわり、鋭い告発をする

昭和35年 全国的反安保闘争に参加、被爆者代表の一人として病をおして上京
(38歳)

昭和38年 第三詩集「烙印」発行
(41歳)

昭和42年 「われなお生きてあり」が完成。2年後に第9回田村俊子賞受賞
(45歳)

昭和44年 「長崎の証言」創刊号にエッセイを書く。以後もエッセイや記録を
(47歳) 寄せる

○ 主な受賞歴

昭和42年 第9回田村俊子賞 「われなお生きてあり」

○ その他の代表作

生きる、被爆後二十年の生活記録(昭40)、原子野に生きる・福田須磨子集(平1)